



長尾和宏 (ながお・かずひろ) 医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

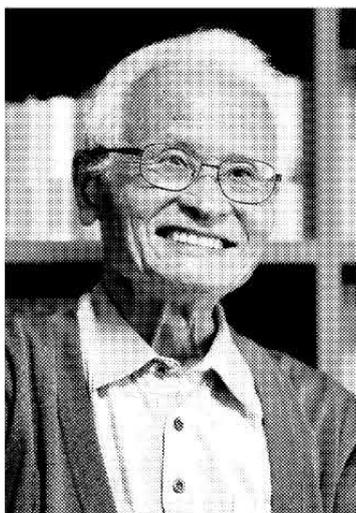
新型コロナウイルス騒動で、てんやわんやの1カ月でしたね。

私は普段、穏やかな死に方、すなわち平穏死、尊厳死について啓発をしている医者ですが、今回のように世の中がパニックになったとき、そうした「死」が、いかに平和な時代を担保にしたものだったかを知ることができません。

こんな日本で長生きなんかしたくはない！ はたまた、なぜ日本では安楽死が認められないのか！ と昨日まで大声で訴えていた人が「長尾先生！ 新型コロナウイルスが怖い…これで死んだらどないしてくれるんや！」と、まるで昨日の自分を忘れたように相談に来られるのです。

一方、外来患者さんも、「変

146 小説家・古井由吉



「国民一丸となって、この危機と闘いましょう！」という空疎なフレーズが国会から聞こえてきます。しかし、私たちは今、何と闘い、何に追い詰めら

れているのか？ 考えれば考えるほど、本質が見えなくなりま

す。

新型コロナウイルスでの死者よりも、わが国では、自殺者や孤独死、さらに言えば、アルコ

「危機」というのは元々、分かれ目という意味らしいんです。〈clitique〉、元はギリシヤ語で、「分かれ目」という意味なんですけど、18世紀のヨーロッパは、「更年期」という意味だったそうです。ただ、「思春期」にもこの言葉を使ったんです。どっちに傾くか、どっちに転げ落ちるかわからない…そういう意味で、「危機」というのは、日常に内在しており、危機があればこそ人は生命力を保てるんじゃないか…」

では一体、「危機」の正体とはなんだろう？ 漠然とした疑問を抱えていた過日、小説家の古井由吉さんが、

まさに、卓見です。人間は、自ら生き延びるために、定期的かつ意図的に、「危機」を作り出すのではないか…？ しかし、こんなこと、医者は大きな声で言えません。もはや文学の領域なのです。こうしたわが国の「危機」を嘆くようにして、偉大な小説家・古井由吉先生は、騒動の最中の2月18日に旅立たれました。死因は肝細胞がん。82歳の作家人生でした。

人は生き延びるために「危機」作り出す？